

精神分析学と集団力学

— 集団体験と理論化 —

東京都立中部総合精神衛生センター 中村俊哉*

本稿では、日常的な、あるいは臨床的な体験をいかに理論にしようかということを考えたい。ここでは、筆者がここ5年ほど関心を持っている集団や組織における体験、そしてその中の個人面接の体験などを中心にするようになる。筆者は、かつて「あるデイケア集団の心理的力動について」(中村1986¹⁴⁾)と言うケース研究を本誌に発表した¹⁴⁾が、それは、体験をそのまま素直に表現するという方法をとった。一瞬一瞬の現象をいかにそのまま感じ取り、言葉にして行くかは、とても大切なことである¹⁴⁾と考える。そして、本稿では、そういった体験と理論とを突き合わせるのであるが、理論とは、あくまでもひとつの切り取り方である。しかし、その理論にたつと、現象がそういうふうに見えてくるので不思議である。そういう場合は、理論を少しずらしてみること、つまり違う切り取り方があることを理解することが、体験を大切に、しかも理解を深めて行くためのひとつの道であろう。

ユング派とグループアナリシス

筆者は、最近 Fiumara というユング派の分析家が、次のような論文を出しているのを知った。Analytical psychology and group-analytic psychotherapy : convergences⁶⁾ という論文で、M. Pines の編集した The Evolution of Group Analysis の中に入っているものである。

彼の試みは、ユング派の理論と Foulkes のグループアナリシスの類似点をあげることで、いくつかの点で参考になるものである。

彼は、Self の概念を鍵に論じている。Jung は、Self とは、全体性の主体であり、ego は、

意識の主体であり、ego は Self のひとつの要素であると、言っている。

これは、個人の中においての話であるが、Fiumara は、Neumann の「意識の起源史」の中の、「集団、偉大なる個人 (Great individual)、及び個人の発達」「大衆人間の形成と再集合化現象」の二つの付論を用いて、グループの中の Self にあたるものを指摘する。

グループの Self は、「隠されたままになっている、意識レベルで現実化していない潜在力を包容 (contain) している」。つまり、意識されない様々な無意識的な要素の統合される中心点のように考えてよいと思われる。それらの多様な要素は、コンプレックスであり、元型 (arche types) であるという。これらの要素は、統合できない場合、他の部分と関わらずに自動的な動きをしてしまうものである。

ユング派では、個性化 (individuation) というものが重視され、目指されていると考えられる。個性化の過程では、諸元型の相互的な統合と調和によって、意識的な ego の内容が継続的に拡大し、個人の同一性が、元型の調整的な中心である Self に置き換えられるとする (Fiumara)。

Fiumara は、余り具体例を出していないところが物足りないところであるが、彼の言おうとしているのは、グループの中でも、Foulkes の理論に現れるように、個人と集合性が出会い、社会的無意識 (social unconscious) = いまこでのグループ状況の無意識、を自覚させることができるということと言えよう。Fiumara は、ユング派の分析、例えば夢分析は、夢の中に含まれる関係のネットワークや心理的文脈の集中

* 昭和68年 博士後期課程満期退学

的吟味を基本にし、グループアナリシスのコミュニケーションの中では、ある個人のメッセージをグループ自体の文脈の中の配置でみる(Fiumara 1985 P.124)という。

体験の分析

さて、ここで筆者は、いままでに経験したグループの中で、意識されない対立物がいかに現れ、統合されて行く過程があったかを振り返りたい。

但し、ここにおいては、元型とか影(shadow)という用語は用いない。筆者は、鈴木純一の主催するグループのやり方(グループアナリシスをベースにすると)言ってよい。定期的なグループで、精神科医、臨床心理士、ソーシャルワーカーを対象にする)を体験的には基本にし、理論的にBion⁴⁾⁷⁾やAgazarian¹⁾²⁾の考え方、あるいはクライン派の考え方でグループを捉えるようになってきている。しかし、グループに現れる投影(projection)とか、分裂(Splitting)という現象は、おそらく、Fiumaraが統合しようとしたところの二つの理論に、共有されるような現象であると言えよう。

しかし、ここで断わっておくのは、グループを記述するのは、大変難しいと言うことである。まず、プライバシー保護の問題がある。そして、あくまでもそのグループを、筆者の目、あるいは記憶で記述するのであり、筆者の見たものでしかないと言うことである。

体験1

次にあげるのは、Agazarianが1987年に、国際集団精神療法学会環太平洋地域会議において鈴木純一と共に開催した体験グループでの体験である³⁾。

ここで、彼女は、日本語を英語に訳させずに、メンバーの動き、笑顔、しゃべらなくなること、うつむく姿勢等のみを手がかりにグループのリーダーをした。もちろん、自分の名前、イボンヌという言葉が聞けるとリーダーの話だと言うことは分かる。彼女は、「グループになるこ

とがこのグループの課題です」、という設定をした。グループでは、よくしゃべる男性数人のサブグループと、若い女性のサブグループがあったようにみえた。Agazarianは、それを指摘した。大事なシフトが起こったと思われるとき、彼女は、今の動きに注意を向けるように言った。しゃべらなかつた人がしゃべった。その後、それがあたかも無かつたかのようにグループは別の話をしていた。そのとき、Agazarianは、何が起こったのかグループは無視することに同意しているかのようだ、と言った。その後、Agazarianとなんとかうまくやって行こうとする感情と、何も伝わらない、分かってくれない、という感情が(個人内にも同時にあるはずだが)、グループでは分裂して現れるように見えた。よくしゃべる「部分」としゃべらない「部分」というのは、時に入れ替わった。それを彼女は次々と解釈していった(Agazarian 1987)。

サブグループ、分裂

筆者は、Agazarianのグループ役割理論、見えないグループの理論について他でまとめたことがあるが¹⁵⁾、ここであげた例は、グループの中のサブグループ間の分裂と、それを統合しようとする力、あるいはそのままにしようとする力が働いたと理解される。

もちろん、このグループは、Agazarianが、新しいやり方=グループを、姿勢や、しゃべる部分や、声の調子、笑い、等のみを通し、決して話される内容からグループを見ないと言うやり方をとったため、その新しさに対する抵抗感もあったことは確かである。これは、新しい観念(new idea)というBionの理論でみると分かりやすいと言える。例えば新しい参加者に代表されるような、新しい観念は、グループにとって破壊的な影響を与え、グループはその観念をそこに封じ込め、グループの他の部分とSplitしておこうとする(Grimberg⁷⁾)。ここでは、Agazarianが、いったい何をしようとしているのか理解できず、怒りに近いものがグループ全体をおおったことがこれに当たる。新しい観念を内

容(contained), グループを容器(container)と見ると、内容 — 容器の関係としてみる事ができる。Bion⁵⁾の理論に馴染みのない方も多いかも知れないので、説明すると、これは、たとえば乳児と、母の乳房の関係のようなもので、いろいろな幻想や、悪い感情を母の乳房にぶつけるが、復讐したりせずに、それを解毒し、安定した感情に変えてくれる。こう言ったプロセスを、個人面接にも、グループにも適応できるとする。

さて、サブグループ間の分裂や、投影同一視(projective identification)についてさらに述べたい。

グループを経験する中で、分裂の現象は大変しばしばお目にかかる。以下に述べるのは、筆者がおこなった体験グループの例で、対象は、臨床心理学を学びつつある人である。改めて言うが、プライバシー保護のため、若干の修正をしている。

体験2

第一回のグループでは、しばらく沈黙が続き、何人かのメンバーは、筆者の方を見て、どうにかして欲しいという顔をしていた。

その後、話が始まり、皆自己紹介をしたが、ここでおもしろいことに、自分の位置する場所(サブグループ)を述べたかのようであった。実際臨床に関係する仕事をしているかどうか、どこ出身であるか、等、いくつかの点に皆が言及した。それは、第二回目のグループで見事にサブグループ化していた。何人かが、臨床的な仕事をしている人がうらやましい、と言うことをしきりと話した。筆者は、そういう現場にいる人に手をあげさせると数人いた。筆者はこの部分に羨望(envy)が向かっているわけですねと説明した。(もちろん、筆者もその要素でもあることは忘れてはなるまい)。なお、この間、グループの皆にしきりと話しかけ、まとめ役のような役割をとったAさんがいた。彼女は、沈黙ができず、グループはこのためにものすごいスピードになった。そして、どうしたら臨床

を学べるか、と言う話が続いた。後からふりかえられるのであるが、この話にのれずにシニカルにいた人が二人居た。

これは、Agazarianではないが、グループの姿勢、しゃべる部分、しゃべらない部分を見ていれば明らかにこの二人、そしてリーダーたる筆者が別のサブグループをなしていた。

ここで、リーダーがこの現象について何等かのヒントを出さない場合、もしかしたらこの二人は、こなくなるかも知れない。この分裂を統合しようとする役割は、筆者がとったことになる。

さて、ここで、話をまとめようまとめようとしたAさんは、グループ全体が付与したグループ役割だとみることができた。これを、彼女のいつものパタン(じっとしていられずに自分が取りまとめる役割をとってしまう)だとみて、それを指摘するやり方もある。しかし、筆者には、これをする、彼女の問題に焦点が行き、新たなグループ役割=identified patientと言うグループ役割を作ることが予想された。これは、Agazarianによると、スケープゴートのプロセスとにているのである。そこで、筆者は、グループ全体がこういう役割を与えている、と何度か指摘した。このことは、沈黙していた一人が、その後の回で、「確かに、Aさんがしゃべるなら放っておこう、しかしそれをやめさせるだけの気持ちもわからない、と思った」という言い方で、自分が流されていたことを表現した。自分の問題として、いまこの体験として言ったのである。

グループ役割

さて、さらにグループ役割について述べる。分裂をどうにかしようとする力と、放っておいてもいいという力が働くことは、Agazarianのグループの例でもあったことである。Agazarianなら、グループの中にある色々の相違(difference)を、理解し、統合して行くこと、そしてそうできない相違は認め合うことと言うのも含まれているが、これが、グループの成長

にとって意味があると言う。統合できない相違は、たとえばスケープゴートとか、サブグループというグループ役割の中に包容(contain)されている。この部分には、おそらく強い感情が感じられているはずである。Aさんには、このグループをなんとかしないと、という感情が包容されていたはずである。黙っていた二人には、ついて行けない—と言う気持ちが包容されていた。これらを理解しようとし、統合しようとしたのは、筆者であるが、これはまたグループ役割であろう。

実は、セラピストと言うのは、最も投影同一視を受けやすい位置にいる。これは、Bion も言っているし(Bion 邦訳 p.158), Neumann も似たようなことを言っている。例えば後述するBionの依存グループや、闘争逃避グループは、セラピストに向けられることが多い。こうしたグループ役割をいかに建設的な仕方グループ全体の成長や理解につなげて行くかが大きなポイントであろう。もしかしたらその役割にのっかって演じることも必要かも知れない。これは、筆者がスタッフグループ役割という様なものを重症の境界例や分裂病の患者の中で感じるときそう思うのである(後述)。

なお、先の例で、沈黙している二人のことをあえて触れる必要の無いときがある。それは、グループが、容器として安定しているときであろう。この時、自然にグループは成長するようになる。また、そうあくせくしないでいいことを伝える人がいると、その人は、グループの母性的な部分を表し、グループのコンテイナーとしての役割をとることになるようである(鈴木純²¹⁾)。

Bion初期理論

さて、Bionの初期の無意識的なグループ役割について触れたので、ここで解説しておきたい。

Bionのグループ理論は、現代ではより新しい視点で読み直されており、その経過について筆者は他紙にまとめた。ここではまずBionの

初期の理論を解説する。⁴⁾⁷⁾

Bionは、小グループにおいて表れる無意識的な動きについて深い考察をした人で、後にクライン派精神分析の中心に位置する人である。彼の指摘するグループ内の力動は、不合理で、原始的な動きであり、読者もこういった感情を曖昧な集団の中で経験したことはあるはずである。

こうした小グループに参加すると、無意識的なグループの側面が活動し始め、集団が退行することがみられる。例えば、グループ全体が、例えばリーダーに対してある想定を共有する場合がある。これを基底的想定、basic assumptionsという。

依存グループ(dependency)といわれるグループの文化では、リーダーがメンバーに対してよいことをしてくれるに違いない、という想定が共有される。グループが始まり、しばらくシーンとした空気に包まれるとき、セラピストの方を見てどうにかして欲しいという顔をしている人を想像されると分かると思う。これがグループ全体を覆う場合がある。これは社会においてはしばしば見られるもので、例えば宗教的集団などであるが、ここで考察する余裕はない。集団精神療法(特に体験グループ)においては、セラピストはこういった依存は満たさない。そのため、依存を満たしてくれないリーダーに対して、不満を抱いたり、別のリーダーをたてようとしたりする動きがある。

これは、対象関係的には、乳房—容器としてのリーダーに対する対象関係を見ることがができる。こういった視点でのBionの読み替えがさきに述べたように、試みられている(Scherm 1985)。

闘争逃避グループ(Fight-flight)では、グループはあるものに対して闘うため、あるいはあるものから逃れるために集まっているのだという想定が共有されてしまう。これがセラピストに対して起こることもあれば、いろいろの事柄に対することもある。

ペアリンググループ(pairing)とは、グルー

プの中のある二人が話を続けており、みんながそれを黙ってみている状態で、しかも、グループ全体が、この二人に対してグループの絶望を救ってくれる救世主を生み出すであろうという救世主願望を想定してしまうという基底の想定である。Bion(1952)では、これはしきりにグループがセックスの萌芽をこの二人にみているという記載がある(邦訳b p.160)。確かに、グループ内のあるつがいは、こういう視点でみられやすいことは確かであるが、難解なところである。これはSchermerのいうように、早期の対象関係のレベルで考えることが重要であろうかと思う。なお、Bionは、個人分析の状況をペアリンググループであるという。実際、分析状況では性的なものが出やすいし、さらに外の人々からは精神分析は性的であるという反対がおこった。これは、ペアリングの力動だという。

基底の想定の対象関係的、自己愛的、神話的

側面については、Schermerにくわしいが、ここでは、表1でまとめることにとどめたい。

この図を見ても分かる通り、小グループの一瞬の中に深い力動を読み取り、理解して行くと言うのは、おそらく訓練と理論的理解とが必要になってくる。また、小グループの中に、神話的な様相を読み取るのは、Bionが、初期、後期ともに試みた深い幻想の理解が、意外とJungに近いのではないかと言う感を抱かせる。実際、クライニアンとユングイアンの理論的な交流は既に長くあり、ロンドンのユング派は、この傾向を強くしている。

これはさきに紹介した Fiumara の論点とも多少違う類似である。Fiumara は、むしろその統合的な側面の類似を言っていたのではないか。異質な内的部分を投影して相手にそれを見ること、そしてそれ(元型とか影と言ってよからう)とつきあって「人間化」して行くこと、

表1 基底の想定状態の性格

	依 存	ペ ア リ ン グ	闘 争 逃 避
前景防衛機制	とり入れ(introjection) 理想化 脱価値化(devaluation)	否認(denial) 抑圧(repression)	分裂(splitting) 投影
対 象 関 係	容器 — 乳房(container-breast)としてのリーダー 対象希求(object hunger) /対象喪失	エディパルと前エディパルの対象関係の凝縮(原光景を通して via primal scene)	悪い、外在化された対象は充滿している
自己愛的様相	リーダーへの過度の理想化は、自己愛的な傷(injury)への防衛である。	自己愛的な自己対象はペアと合同(merger)	原始的(primary)自己愛 自己愛的激怒(rage)
神話的様相	リーダーは反英雄(anti-hero)、予言者(prophet)神(deity)	メシアン神話; 英雄誕生神話; 創造神話;	善と悪(good and evil)の間の闘争(struggle) 楽園喪失(paradise lost)
役 割 (roles)	リーダーへの二重性(dual)依存と対抗依存(counter-dependents)	マリアとヨセフ 過人格的、非人格的(overpersonal and impersonal)	闘争リーダー 逃避リーダー
生物発生的核 (core)	子供の養育ときずな	再生産(reproduction)と生産	グループを危険から保護

異質な部分を交流させ、統合して行くことが、Jungにも、Foulkesの（あるいは、鈴木の）グループアナリシスにもあると言うことである。なお、ちなみに、Samuels¹⁹⁾によると、例えば親に対して元型的なものを投影しては、とても人間的な交流はできないと言う。分析の過程は、この元型を人間化することであり、交流しうるものにするのだと言う(Samuels p. 45)。強い投影を、少しずつ引き上げると言うことである。これは実はグループの中でもあることで、投影したり引き上げたりを波のように繰り返すと言える。これは、後期のBionの用語で言えば、P S ↔ Dの振動で表される。²⁸⁾ネオクライニアンは、たえずP S（妄想的分裂的ポジション）とD（抑うつポジション）の間に振動がおこっていると考えるが、これを個人分析のみでなく、グループにも認めることができる。

さて、次に、やや広い視点で集団を見て行きたい。上記の理論が、小グループ中心であったことは、その理論の限界でもある。もちろん、Bionらは、分析の二者関係、三者関係、グループへと、シフトして考察しており、説得力がある（James⁹⁾）。

大集団について、タビストック研究所の毎年のレスターカンファレンスが多少とも参考になると思う。

Olya Khaleelee and Eric Miller は、Beyond the small group : society as an intelligible field of study¹⁰⁾ という論文を出している。これは、やはりMalcom Pinesが編集したBion and Group Psychotherapy (1985)に含まれている。

Khaleeleeらは、Freudはその領域を一者から二者関係に広げ、Bionがその領域を小グループ及びさらに広い領域に広げたとした。筆者にすればBionの身体病、貨幣に関する考察は、とても納得しうるものではないが、今後の大切な研究領域であることは確かであろう。タビストックでは、大グループの経験と、組織コンサルタントの経験から理論化されていった。

Turget(1974)は、違うサイズのグループの力

動と神話を明らかにし、ペア、三者、5-6、8-12、20-30、50-80人のグループの比較をしている。そこで彼は、基底的理想にもうひとつ、Group of onenesを加えることを提唱する。これは、グループがひとつになろうとする力で、万能的な力が働き、Selfは、受身的な参加を余儀なくさせられる。

彼によると、小グループでは、リーダー、メンバーの役割ができやすく、基底的理想がみえやすいが、大グループでは、多数の部分に分割されやすいという。そして、大グループはある個人に投影の機会をより多く与え、いけにえ等の無慈悲な現象があらわれることになる。

Rice¹⁸⁾は、基底的理想概念が、小グループではたやすく観察される特殊概念だと言う。なぜなら、小グループは、対抗リーダーシップに力を与えるに十分な大きさで、しかも、一度に多数の対抗リーダーシップをもつほど大きくはないという。(Khaleelee P.360)

また、ワークグループのタスク遂行には、グループメンバーのほんの一部しか使っていないことを示す(Rice 1960 P.40)。

なお、一時的な、構造のあいまいなグループにおいて、たやすく健康人がサイコティクになる記載は、興味深いものがある。

ここで、Kernberg¹¹⁾の入院精神療法についての記述を思い出す。彼は、一対一の分析では退行には長い時間がかかるが、グループでは深い退行はすぐに起こると言う(Kernberg邦訳 P.199)。小グループでは、原始的な対象関係が増大するとする。一方、院内の課題集団は、これらの原始的对象関係は最小となるので、分裂病、境界例に有効だという。

さて、やや大きい集団に考察を進めてきたが、ここで、組織に対してクライン派の分析理論から考察を進めた人に、Menzies 13)がいる。彼女は、一般科の病院の力動を明らかにしている。ここで、筆者の経験を再び出す。

体験3

筆者が交通事故で左足を怪我して形成外科に

入院していたときの体験である。ここで筆者は、3人の主治医がついていた。一人は、初診時に縫合してくれたM女医であり、専門的な用語で説明してくれる人であった。

病棟で気づくのは、16人の看護婦、看護師が、同じことを何度も聞くことである。またとなりの患者には、7-8人の看護婦が同じ冗談を言っていた。また、本人が秘密にしたいようなことも、引き継ぎで次々伝わるらしく、全ての人が巡回時に聞いていくのである。

なお、ある時、筆者は、M女医に相談したいことがあり、ある看護婦に頼んだ。その看護婦は、明らかに戸惑い、病棟医は、別の医師であるような意味のことを言った。

組織における分裂

病棟の看護婦についての力動には、Menziesの理論があり、大変おもしろい考えを提示している。Menzies P.5では、一般科の看護婦の感じる苦しみ、驚き、性的欲望、罪悪感、憎しみ、憤慨等の感情が大変リアルに描かれる。病棟の患者の状況は、彼女らに早期のPhantasyを再活性化化するという。特に、患者の依存、羨望、エロチックな感情、さらに家族の要求がましい批判、等が大きい影響を与える。そして、彼女らがとる防衛を10ほど記述する。

1. 看護 — 患者関係の分裂(Splitting)。これは、コンタクトの制限であり、仕事はタスクのリストに分割する。
2. 離人化、個の大切さの否認。患者は、他の患者と同じであるという倫理があり、好みも言わない。患者側も、どの看護婦がこようと同じである。
3. 無関心と感情の否認。異動もいやがらない。
4. 決定を避け、儀式的タスク遂行を試みる。
5. チェックと再チェックにより決定の責任の重さを減らす。
6. 責任と無責任の共謀の社会的再分配。集合的に分裂させ、投影しているものであり、上級看護婦は、下のものを無責任だと投影し、下の看護婦は、上の人に厳しい統制を望む。

自らのSplittingした部分を相手にみている。

7. 責任の正式な分配の意図的曖昧さ。

8. 上司への委任による責任のインパクトの低減。個にかかる責任はこれにより低くなる。

下のものは、上司にベスト、有能を投影する。

9. (新卒への)理想化と、人格的発達の可能性の過小評価。採用の時は厳選。

10. 変化を避けること。社会防衛システムが変わるとき不安が増大するため。ふさわしくないものに必死でしがみつく。

これらの防衛は、決して成功せず、むしろ本来の仕事の機能は大幅に低下するとする。

さて、体験3においては、1,2が見事にみられたことは明らかである。

なお、3人の主治医がいると言うことは、ある独特の力動を引き起こしたと言える。まず、3人の中で情報交換がうまくいっているとはとても思えなかった。抜糸をしたことをM女医が知らず、シーネをとったことをT医師が知らなかった。これは現実的にリーダーシップ争い、及びその抑圧としての遠慮が働いていたか、あるいは、単に情報の流れのシステムが悪いと考えられた。しかし、ある看護婦が、筆者がM女医を選ぶ行為に難色を表したことから、スタッフ内の不安感がかいまみられた。つまりチームの分裂を嫌ったのである。

もっとも、人が、あるチーム、あるペアにたいして、分裂(Splitting)の幻想を持つことは現代の傾向である可能性がある。

ここで、やや大きい集団であり、曖昧な集団であるデイケアについて取り上げたい。筆者がかつて報告した事例から、再理論化を試みる。

体験4

中村 1986のP.53: エピソード3: K氏(30才、境界例)は、ある小集団話合いの(この日は深い話ができたと思われた)、休憩中に、筆者のところによってきて、にこにこ「スタッフミーティングの内容を知らせて」と筆者を困らせるが、冗談だとのこと。また、「話合い中に出了職員の話は、スタッフミーティン

グでは言わないで」と言う。

なお、K氏は、常々、スタッフはなんでもでき、司会などもうまいが、利用者はそういうのか下手で、よく見習わなければならないと言う考えを表明する人であった。

P.56: エピソード8: ある病院のデイケア祭に皆で行くことをスタッフが提案、多数決の時、スタッフ5人全員が賛成に回ったため、すれすれで可決した。このときK氏は、何故スタッフが賛成するのかを一人ひとりに言わせた。ここで、初めて、今までの交流会へのマイナスのイメージが表現される様になり、グループが変化し、むしろ職員への批判の雰囲気が出てきた。K氏の案で、職員抜きで多数決となり、今度は否決された。司会も困ったし、皆も困ったが、ここで、利用者（なお、このころまでは、メンバーのことを利用者と言っていたが、この後しばらくしてメンバーと呼ぶようになった）の意見を尊重する、と言う案にスタッフ4人をふくめて多数が手をあげた。

何日か後、雑談中にK氏は、筆者に休日中のボーリングを誘った。「職員と利用者が離れてしまっている。僕が利用者代表、中村さんが職員代表でそれを変えていこうよ」という。筆者は、受けなかったが、行事を一方的にやられる感覚があることを理解したことを伝えた。

スタッフ役割、否認、治療者患者元型の分裂

ここで、スタッフミーティングの内容や、引き継ぎの内容を知りたいと言うのは、かなりの臨床現場で経験することであることを指摘しておく。そもそも、スタッフミーティングは、スタッフが対応を検討し、自らを振り返るレビューグループであるはずである。メンバーは、行動上の諸問題を解決しようとしており、あるいは、今後の人生設計をするための猶予期間として参加している。これを助けると言うのが、このデイケア集団の場である。

この中でスタッフが噂を言いあっているような幻想をもたれることがあるわけである。なお境界例の集団では、スタッフ集団が分裂している

ように投影同一視し、実際に操作的に動かしてしまふことは指摘されていることである。スタッフが統合されていた方が、グループ役割という、Agazarian の言うようなあるいはBionの言うような役割となり、さまざまな投影を受けそれを建設的に解毒して返すと言うコンテイナーとしての役割を果たしやすいであろう。筆者は、1986年の時点では、K氏のページを、批判を自由に言える環境になった、とみていた。これは少し舌足らずであったと思う。実際は、筆者とK氏は、このデイケア集団の大きな問題を、包容していたのであり、その責任は重いものであった。筆者は、この後、スタッフミーティングは、レビューとして位置づけ、充実させる方向に、つまり、乳房としてのコンテイナーを確固としたものにし、一方、全体ミーティングは、問題をコンテインできるだけの自由な話ができる場に、と言う方向で提言して行くことになった。これは、筆者が包容したグループ役割であった。これは、ボーリングへ行くことなどでは解決しないもので、あの誘いはペアリングの空想であったと思われた。ここでさらに述べたグループ役割に乗ること、演じることも必要な場合がある、と言うのは、コンテインする、母性的なスタッフ集団の役割のことなどである。もちろん、ボーリングに言って一体感を演じることもひとつの方法であるとも言え無くもない。

ここで、さらに疲れの否認という集団的防衛にスタッフもメンバーも陥りやすいということを指摘したい。

グループワークでは、ある時期やたらと外に出る計画をたてる。自分たちが疲れていることを自覚できずにいると、突然に休んだり、消極的になったりして反応する。これがスタッフをいらだたせ、その絶望感をまたスタッフは否認する可能性がある。

これは、体験グループでも起こることである。リーダー役をする人が疲れており、しかもそのことを意識していないと、グループは意外とスピードが速くなり、そう的になってしまう。そ

のとき、他の疲れた人を置き去りにすることがある。これは体験2におけるAさんに近いかも知れない。これを自覚していることが必要である(鈴木²²⁾)。

同じように、体験グループでは、怒りの否認と言うことも起こる。リーダーに対して、あるいは、自分の影に対しての怒りを、ないかのごとく振舞うことがある。これをいかに意識化するかは成長への鍵である。

実は、精神科の社会復帰段階のグループでは、常に先行きの絶望感が隠されていることは指摘しておきたい。人生設計がたたず、目標を下げることも残っていない場合がある。これを理解しないと、スタッフもいまここで何が起きているかが見えなくなるであろう。しかし、患者同士の自助グループで、意外とこういう将来のことが共有化され、個性化して行くことがある(いずみ会 1989年10月)。

さて、ここで先のK氏の例には治療者患者元型というグッゲンビュールクレイグ⁸⁾の考え方が当てはまる。これは、治療者元型と患者元型が分裂している状態をさし、これをいかに統合し、傷ついた治療者になりうるかと言うことである。決して治す人、指導する人、と言ったものではなく、自らが傷みを分かる治療者である。この統合ができるとひとりでに自己治癒力が出てくるとも言えるのである。

以上、いろいろな理論的視点を提示することを試みてきた。今後の検討を要するところであろう。

社会：大きな集団の分析

大きな社会のでき事も、体験そのものを大切にし、しかもいろいろな理論を付加するとどうなるであろうか。例えば最近の経験为例にとる。

1989年6月4日の中国天安門事件の報道(特に6月7-8日)では、楊尚昆国家主席直属の戒厳部隊27軍と、元々北京防衛に当たる38軍の間で武力衝突が激化したとされ、内戦前夜の雰囲気共有されたのは記憶に新しい。しかし実際は内戦にはなっていなかった。また、その前の

戒厳令に際しては、5月末、改革派とされる万里の帰国に対して何かが変わるのではないかと、思いつつ全世界が注目していたことを思い出す。実際は万里は帰国後、何等かの変化があった様子はない。改革派の多いとされる全人代常務委員会が開催されることへの期待、などもあった。

香港情報を手がかりに、世界の識者は、相手(中国)側の分裂splittingを空想し、万里と超紫陽への救世主待望を空想した。

少し大きい集団(世界)を対象にすることになったが、実は、こうした領域も政治心理学的領域として考察の対象になるはずである。もっとも、事実関係は今後を待たなければはっきりしないので、現時点の理解であることをお断わりしておく。

今後、さらに集団や面接の深い理解をめざしたいと思う。

参考文献

- 1) Agazarian, Y. M. & Peters, R. : The Visible and Invisible Group, Two Perspectives on Group Psychotherapy and Group Process 1981. Routledge & Kegan Paul, London
- 2) アガザリアン, Y.M. : 見えないグループの理論 池の金魚の行動の2つの見方 鈴木純一訳 集団療法3-2 1987.
- 3) Agazarian, Y. M. : Similarities and differences example : Intervention to non-verbal data : Japan 1987 鈴木純一氏への私信。
- 4) Wilfred R Bion : Experiences in groups 1961 a) 池田数好訳 集団精神療法の基礎 岩崎学術出版 b) 対馬 忠訳 グループアプローチ サイマル出版。
- 5) W, Bion : Attention and Interpretation 1970 London : Tavistock
- 6) Romano Fiumara : Analytical psychology and group-analytic psychotherapy : convergences in ed M. pines The Evolution of Group Analysis 1985 Routledge & Kegan Paul

- 7) Leon Grinberg: Introduction to the work of Bion 1977 高橋哲郎訳 ビオン入門 岩崎学術出版。
- 8) グッゲンヴェールクレイグ, A.: 心理療法の光と影 桶口和彦, 安溪真一訳 創元社 1981。
- 9) D, C, James: 1981 W. R. Bion's contribution to the field of group therapy: an appreciation, chap. 4 in Group and Family Therapy ed Wolberg, L., R. et al, New York, Brunner/Mazal
- 10) Olya Khaleelee and Eric Miller: Beyond the small group: society as an intelligible field of study in ed Malcom Pines Bion and Group Psychotherapy 1985
- 11) Otto F. Kernberg: Leadership and Organizational Funktioning: Organizational Regression INTL J GROUP PSYCHOTH. 1978
- 12) O. Kernberg: 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版。
- 13) Isabel E. P. Menzies: The functioning of social systems as a defence against anxiety: A Report on a Study of the Nursing Service of a General Hospital
- 14) 中村俊哉: あるデイケア集団の心理的力動について 上智大学臨床心理研究10 1986。
- 15) 中村俊哉: 分析的集団精神療法におけるグループ全体志向の理論: Bion (初期, 後期) 及びグループ役割理論 未発表。
- 16) Malcom Pines ed: Bion and Group Psychotherapy 1985
- 17) M. Pines: Individual Chang in the Group Setting 式守晴子訳 グループ状況の中での個の変化 集団精神療法5-1, 1989。
- 18) Rice: Individual, group and intergroup process Human Relations 22 1969
- 19) A. Samuels: The Father: Contemporary Jungian Perspectives 1985 Free association London 小川訳 父親 紀ノ国屋書店。
- 20) Victor L Shermer: Beyond Bion: the basic assumptions states revisited ed Malcom Pines Bion and Group Psychotherapy 1985
- 21) 鈴木純一: 精神療法研究会 第3期, 第二回グループにおける指摘。
- 22) 鈴木純一: 同 第一期 4月のグループにおける指摘。
- 23) 鈴木 龍: 1987 上智大学精神分析研究会での講義。
- 24) Turget: Leadership: the individual and the group in Gibbard Analysis of Grpups Jossey-Bass 1974